

加賀象嵌

加賀象嵌（かがぞうがん）は、石川県（旧加賀藩）の装飾金工技法である。彫金技法のひとつであり、彫金は 1955 年に重要無形文化財に指定された。

加賀象嵌は、金や銀などの柔らかい金属を、硬い金属の地金に平らに埋め込む平象嵌の技法である。地金に斜めに切り込みを入れ、開口部より底部の方が広くなるようにする。このくぼみに、象嵌した金属を打ち込んで表面を滑らかにすると、金属が広がり、地金の張り出した部分によって固定される。また、加賀象嵌は重ね象嵌や、色金と呼ばれる銅合金を用いて、多彩な色彩を表現することでも知られている。

加賀象嵌は、江戸時代（1603－1867）に加賀藩で生産された鎧や馬具と強い結びつきがある。この時代、加賀藩は金工をはじめとする伝統工芸に大きな投資を行っていた。加賀藩は、京都や江戸（現在の東京）から有名な金工職人を招き、職人たちを指導した。その結果、美しく丈夫な象嵌細工が生まれ、将軍や諸大名に献上され、ソフト・パワーが発揮された。

現在も加賀象嵌は芸術として存続している。石川県の職人たちは、その技法を守りながら、ジュエリーやアート、インテリア、室内装飾など、新たな表現で加賀象嵌の魅力を伝えている。2004 年、中川衛（1947-）は、その彫金技術が評価され、重要無形文化財保持者に認定された。